

母をとおして人間存在の真実を

透視してしまう人

岡村直子詩集『帰宅願望』に寄せて

鈴木比佐雄

は二〇〇三年に第一詩集『をんな』を刊行している。その中に「ごみ袋」という人生や生あるものの極限を透視した詩があるので引用してみる。

ごみ袋

1

岡村直子さんは、世間の常識や虚飾に縛られずに、素直に感じたことを表現しようとする鋭い批評性のある詩人だ。先入観を抱かないで、社会や世界の在り方を自己の内面に深く通過させて、直観したものを詩に刻むことが岡村さんの課題であつたと思われる。その意味で岡村さんは、自己の生き方を突き詰めながら詩作をする、芸術を生きようと試みるタイプの表現者だろう。と同時に岡村さんの詩篇は、自己の現実を他者の視線で厳しく見詰めることができる内面性と他者性の両方を詩作の中に濃厚に感じさせてくれる。岡村さん

半透明の
家庭用ごみ袋の中にも
自分の終りがみえてくる
皮を剥かれた野菜や果実
型を失った菓子類
宴のあとに残されたもの
つい いましがたまで
生活を潤していた
ものたちが

袋の中に ようしゃなく
押し込まれていく

火葬場で台の上の

白い骨のふれあう音と

ごみ袋のふれあう音が

私の中で重なっていく

葬るという意識を除けば

私も 焼却場のごみ袋も

同じなのかもしれない

詩集『をんな』の中には、「点滴」や「ごみ袋」

などのように大病をし生還された経験を記した詩篇がある。岡村さんは生ゴミと自分の遺体が等価であるという冷徹な認識を抱いている。このことは、人間がこの地球で特別な存在であるという特

権的な意識を捨てて、生あるものの本来的な在り方を指し示している。ごみ袋からこのような人生を見通すような詩が作れることは、きっと岡村さんの思考方法が自己や人間を相対化して、いつも物事を根源的に眺めようとしているからだろう。

今年の三月十一日の東日本大震災によって明らかにされたことは、人間に都合よく地球は存在しているのではないという現実だ。専門家と言われる科学技術者の閉ざされた合理的な思考方法そのものが、限られた人間中心の歴史のドグマに捉われており、地球の歴史に相容れないものだった。歴史上存在した天変地異は、これからもそれ以上の規模で起りうる可能性があり、最悪の事態の想像力を駆使した予見の裏付けがなされてなければ、原発などは、作るべきではないという地球が発した教訓だった。またその専門家を免罪符として原発推進した政治家、官僚、電力会社、原発メー

カ、マスコミたちなどの隠されていた無責任さも明るみに出された。人間の科学技術の力などは、自然の破壊力には無力であるという謙虚さが、本来的には自然と共存する知恵の端緒になるのだと痛感させられたことだった。この詩「ごみ袋」を読むと岡村さんにとってはそのようなことはきつと当然過ぎる認識であったに違いない。また次に引用する「肩書」という詩は、岡村さんの人間の個性を剝奪させる社会の不自由な在りようを痛烈に批評している詩だ。

肩書

私は不思議でならない

肩書というものが

係長 課長 部長と

呼び合うことが

異動があると

初めて聞く肩書が

どんどん増えていくことが

みんなが

すらすら覚えて

すらすら呼べて

肩書の顔が

引き締まってくるのが

私はさらに不思議でならない
街で出遭った

肩書のはずれたX氏の顔が

のっぺらぼうであったことが

この「肩書」の視点は、誰もが実は感じている

ことなのだが、組織の中に埋没してしまつて、本来的な自分の顔も亡くして「組織の顔」が当たりまえになつてしまふ恐ろしさだ。この「組織の顔」に慣らされてしまったひとが、その仮面を外された時に、もはやもとの自分の顔に戻ることができない恐れがある。この組織に飼ひ慣らされてしまふ不思議さは、きつと組織に強く縛られていない子供や女性の方が強く感じているだろう。岡村さんの詩「肩書」には、例えば原発を安全だと推進してきた日本社会の硬直化した組織のあり方が人間にもたらす非人間性をあぶり出して、その根本的な問題を痛烈に批判する荒々しい強さがある。第一詩集『をんな』の詩篇は、いわゆるおしとやかで物言わぬ女性ではなく、既成概念に捉われない現実根ざした女性の直観を通して語りだす、本来的な人間の在り方を考えようとした試みだと私には読むことが出来た。

2

新詩集『帰宅願望』は、四章に分かれ四十三篇が収録されている。一章「六月の朝」十三篇には、岡村さんの感性の所在やそれを形成した来歴や旅の記録などが表現されている。冒頭の「六月の朝」は、六月の朝に戸口に匂の鮎が届けられていて、そんな朝もやの中を神獣が何かを啜えて逃げに行ったことを目撃してしまう。岡村さんにとって詩とは、その神獣が啜えていった何かを探すことなのだと言感させている。その何かとは、岡村さんの美意識の探求であるのだろう。例えば詩「六曲一双」では、光を抑えた展覧会を見た「若冲、白隠、蕪村、宗達」たちの作品の中に描かれた、元の庭の花鳥風月の光景を想像し、梅の香をかいでしまおうとする精神だろう。詩「山百合」では娘時代に母の嫂が好きな山百合を抱えて届け

たことがあったという。嫂から母は冷遇されていたはずなのになぜ自分にそれを届けさせたのか。山百合という存在そのものが、女たちの不和を超えて暮らしを形作った重要な美意識であったことが示されている。詩「ある夏の日」では、若くして亡くなった兄と下野街道筋を歩いたことを夢の中で想起する。兄と再会するのは嬉しいのだが、いつも足早に去って行って自分は取り残されるのだ。その街道筋の空には積乱雲が立ち昇り、暗くなり雷鳴がなり、大雨となつて多くの人々が逃げ惑うのだ。このように亡くなった親族たちが、岡村さんが想起する絵画の中に立ち現れてきて動きまわり、新たな詩的な時空間を形作ってとてども興味深い詩篇群なのだ。その中でも「額縁」という詩を引用してみたい。

額縁

駿河湾を見下ろす
小高い山の健康ランド
眩い朝
伊豆の山々の裾野は
陽炎のように朦朧と
空と海の境界は
ゆるやかな弧の一筆描き
一年前*
この水平線の遥か彼方
狂い立つ津波は
天にも届く勢いで
あまたの民を日常を
一息に飲み込んだ
耳に畳み込まれている東海地震

揺れ続ける耐震偽装問題
オアシのためなら
同胞の命まで捧げます
骨抜き屋根で
列島が鳴咽^{ナゲ}く

まどろんでいる海
波は何も語らない
窓枠一面の
今朝の絵は
あまりにも
出来すぎている

*スマトラ沖地震

この伊豆の海を眺めながら、「狂い立つ津波は

／天にも届く勢いで」二十二万人の命を奪ったス

マトラ沖地震を想起する岡村さんは、尋常ではない危機意識を抱いている。それは「オアシのためなら／同胞の命まで捧げます」という人間たちが、責任ある立場において最悪の事態に見て見ぬ振りをしてきたからだと告げている。「まどろんでいる海／波は何も語らない」で「額縁」の絵のような海の光景に、岡村さんは最悪の津波の想像力を抱いているかのようだ。私はこの「出来すぎている」光景の中に岡村さんの鋭い批評性や予知能力を感じ、優れた詩とはこのような自然や歴史を踏まえた文明批評的な直観を内に孕んでいる詩だと再認識させられる。一章にはその他「あめのふたかみ」、「補陀落浄土」、「南の海に」、「鬼界ヶ島」^シ「七五三繩」^メ、「亀」などの旅の詩でありながら、その場所の歴史から死者を甦らせて深く対話をしようとする試みがなされている。

II章「帰宅願望」十篇の全ては、岡村さんの母との関わりについての詩篇だ。母への感謝の気持ちを述べたものではなく、母を一人の人間として眺め、老いて死んでいく人間の悲しみに迫っていく試みは、書き手の岡村さんにとっても身を斬るような辛い経験であったに相違ない。しかしそれを超えて赤裸々な母親像を書き切ったことは、数多の母を描いた詩群の中でも特筆されるべき詩群だと私には感じられた。詩「帰宅願望」を引用してみる。

帰宅願望

一カ月に数日間
母と別々な日を過ごす
着替えて察するのだろう

アソコニハ イキタクナイ
毎日繰り返す僅かな抵抗も呑みこみ
毎日母はわたしの車に乗る

ロビーに立つと
奥から係りの者が迎えに来る
茶髪の若い青年

はじけそうな身体の娘
物分りのよさそうな年高な女
毎回違う顔に笑みさせ浮かべ
オネガイシマス と

母はにわかに素直な老女になる

母の手はわたしから
血のつながらない人の手に託される
縮こまった後姿が
ゆらめきながら

視界から消えていく
振り返ることもなく

約束の日がきて
母を迎えにいく

決まって車の中で母は言う
アア アリガタイ アリガタイ
モウ キテクレナイノカト オモッタヨ
ナオコ

渡されるノートにはいつも書かれている
——キタクガンボウガ ツヨイデス

梅雨明けやらぬある日
イキタクナイモットトオイトコロ に
母はもう
出かけたつきり

私はこの詩を初めて読んだ時に帰宅できない岡村さんの母の悲しみを痛いほど感じた。またこれを記した岡村さんの母への言い知れぬ絆というか、母を施設にあげざるをえない贖罪感にも似た思いを感じた。老いた母を月に何日か施設に任せることは、介護する家族にとっても助かることだろう。しかし母はたとえ数日であっても、二度と家には帰れない予行演習のような思いを抱いた。この母の予感、いずれ永遠に娘のいる家に戻ることはない旅の始まりであることの直感なのだろう。帰宅願望とは、自分の暮らしの現場で生きるという激しい生への執着であり、人間の残された生命力でもあり希望であるのだ。岡村さんは母を通して人間の生命力の根源である「帰宅願望」を垣間見せてくれた。岡村さんは人間が誰も母のように「帰宅願望」を抱きながら、遠い世界に旅立っていくことこの宿命を語っている。それは母であり自

分であり他者である生あるものたちが、帰宅願望を抱かずに自宅やコミュニティの中で生きていることの奇跡のありがたさへの感謝も伝えてくれている。そして3・11以降の時代は、地震・津波・原発事故で帰宅できない多くの人びとの「帰宅願望」をどのように支援していくかをこれから私たちが問われていくだろう。その意味でこの詩集タイトル「帰宅願望」はとても重たいテーマを私たちに投げかけていると感じられる。

Ⅲ章「道行き」九篇は岡村さんの身体を通して日常的に触れ合う物に感じている視点で記されているが、各篇には独自の視点があり、岡村さんが等身大の生活感を大切にしながら詩作を継続していることがよく分かる。

Ⅳ章「ヤドリギ」十一篇には、社会性のある詩篇が収録されている。詩「ユウレイソウ」は静岡県浜岡原発の危険性を以前から警告している詩

だ。東日本大震災以後に書かれた「小女子」もまた浜岡原発の将来の放射能汚染の危機意識を自分の問題として記している。詩「ペットボトル」なども、ペットボトルを湯たんぼにする生活の知恵を詩にした暮らしに役立つ詩篇だ。最後の詩「風」は、一人の単独者として生きようとする心情を詩に結晶した岡村さんの代表作だと私は考えている。最後にこの詩を引用してこの小論を終えたい。岡村さんは静岡県内で詩と同時にエッセイを発表してきた。静岡県の関係者はもちろんだが、女性の独自の視点を持ちながら、一人の自由な人間として芸術・文化を愛し、社会や世界の問題点と対峙して詩作を試みてきた岡村さんの詩篇を、多くの人びとに読んで欲しいと願っている。

風

二度と会えないのだから

風は

モノを創り

物を破壊する

人間のようにな

風は言うだろうか

いや

人間が

風のような

と

海辺の部屋のカーテンが
はたはたと
風にそよいでいる

長い年月をかけて

異国から渡ってきた風は

何を見

何を感じてきたのか

窓辺をひたひたとこすり

突如 宙返りなどして

自分をアピールさせ

さつと逃げていった

そんなに急ぐことはないのに
今日のお前さんとは

もう

岡村直子詩集『帰宅願望』栞解説文
鈴木比佐雄

コールサック社
2011